

岩手大学教育学部「英語音声学講義」における課題レポートの分析と考察

——学生による英語発音問題の模擬的作成への取り組み——

犬塚 博彦*

(2002年3月20日受理)

Hirohiko INUZUKA

An Analysis of Term Papers on “English Phonetics” at Iwate University

——An Attempt by Students to Make Examination Questions on English Pronunciation ——

1. はじめに

本稿は、筆者が岩手大学教育学部英語科において平成13年度後期に担当した「英語音声学講義」において、学生たちに将来の英語教師に向けての意識を高めてもらうという意味を込めて、レポート課題として、高校初級レベルを想定した英語の発音に関する模擬問題の作成を課し、提出されたレポート内容からうかがえる学生たちの英語音声に関する理解度や学生たちが示した作題の着眼点等の傾向を分析しまとめたものである。

英語の音声については、中学校や高等学校の段階では主に英会話やリスニング等の練習を通して実用面および実践的な観点から触れる機会はあるものの、英語音声学という学問としては大学に入ってから初めて体系的に学ぶことになるわけである。岩手大学教育学部においては、英語音声学に関しては学校教員養成課程中学校教育コース英語科の科目として、英語音声学講義(1年次後期)、英語音声学演習Ⅰ(2年次前期)および英語音声学演習Ⅱ(2年次後期)が開講されている。教育学部における英語音声学の授業であるので、学生に英語や日本語の音声のしくみについての理解を深めてもらうという意味での通常の授業の中に、教員養成のための取り組みという色合いをより多く反映させて、学生が将来教職に就いた時に、実際の教育の場で何らかの形で応用できるような内容が盛り込まれているのが理想的ではないかと考えられる。

ところで、学生たちが将来教職に就いて自分の授業を受け持つようになると、試験問題を「作る」ということをやがて経験するようになるわけである。大学に在学している間は、学生たちにとっては試験というものは「受ける」ものであり、試験問題というものは出されたものをひたすら「解く」ものであるという意識で普段は受身的に接しているものと思われる。そこで視点を少し変えて、教職を志望している学生たちに、教師の仕事の一端に触れその意識を高めてもらうための一つのきっかけに

* 岩手大学教育学部

なればと思います、授業で学んだ音声学の知識が反映されるような形で英語の発音に関する試験問題を模擬的に作成するというのを体験させてみるのも決して無意味なことではないと考えた。このような背景から筆者は、平成13年度後期に担当した「英語音声学講義」において、そのレポート課題として、英語の発音に関する模擬問題の作成を学生たちに課すことにした。本稿は、学生たちから提出されたレポート内容を分析し、そこから読み取ることのできる英語音声に対する学生たちの理解度やその着眼点の傾向などを考察しまとめたものである。

2. レポートの課題内容

レポートの課題内容については、平成14年1月24日(木)の講義時に「課題レポート案内」を印刷したものを学生たちに配布し、次に示す3つの観点から説明を行なった。説明の中に含めたその3つの観点とは、(1) 出題領域と設問の形式について、(2) 解答および解説に含めるべき内容について、(3) 作題にあたっての留意点その他について、であるが、それぞれの要点をここに整理しておくことにする。

2. 1. 出題領域と設問の形式について

まず、出題の領域についてであるが、英語の発音問題としては、音質を問うもの、アクセントを問うもの、イントネーションを問うものなどさまざまなものが考えられるが、今回のレポート課題においては、英語音声学講義の授業の中で重点的に取り扱った領域と関連づけるために、英語音声の中でも特に音質面を問う問題にその対象を限定することにした。そして設問形式は選択式を採用することとし、以下に示すような雛型をもとに作成するように学生たちに指示をした。

[問] 以下の各組の語について、見出し語の下線部と同じ音を含むものを

(a)~(d)の中から一つ選びなさい。

(1) ○Q○○○

(a) ○○○Q (b) ○Q○○ (c) Q○○○ (d) ○○○Q

作題にあたっては「素材」として使用する語は2,000語レベルを目安にして、難易度としては高校初級向けを念頭において取り組むように学生たちに指示をした。また、市販の問題集等は素材選びの過程で参照することは差し支えはないが、あくまでも自分の力で考えて作るようにということもあわせて伝えておいた。

2. 2 解答および解説に含めるべき内容について

学生たちにはまた、それぞれのレポートをまとめるにあたっては、上記の雛型を使って設問を提示するのにつけて、できるだけ詳しい内容の解説を以下の(1)~(5)の順に沿って書くようにという指示をした。

- (1) 設問の中の見出し語および選択肢に含まれるすべての語に対して、英和辞典にあたってその音声記号を転記し、その上で正解を明示すること。
- (2) 各設問に対して出題の趣旨を明確にすること。つまり英語の音声についてどのような項目を問うものであるのかということを音声学の術語を使って明確な言葉で表現すること。
- (3) それぞれの選択肢にそれぞれの語を配置した意図や狙いを明らかにし、設問ごとの難易度の差や

予想される間違い等を記すこと。また、作題にあたって配慮した点や苦心した点があればそれを明記すること。

- (4) 各設問において選択肢ごとに予想される解答率を記すこと。予想解答率という言葉は奇妙に響くかもしれないが、ここでは、それぞれの学生が問題を作るにあたって、「この問題であれば多分このくらいの出来具合になるだろう」とあれこれ想いを巡らしながら取り組むのもそれなりの意義はあると考えたからである。これはまた、単語の選定や選択肢の設定などのさじ加減について考えてもらうきっかけにもなるものと思われる。
- (5) 英語の綴り字と発音との関係に触れ、さらに類例をあげること。

2. 3 作題にあたっての留意点その他

作題にあたっての留意点として学生たちには以下の二点について注意を喚起した。一つは、それぞれの設問が日英両言語の音声上の特徴やその違いをテーマとしたものであるということ、もう一つは、それぞれの設問における選択肢の設定にあたっては、ポイントを理解している人と理解していない人が明確に区別されるような働きが盛り込まれるように心がけるということである。

課題レポートの採点・評価の基準としては、提出期限の厳守や分量など形式面に関する条件を満たすということに加えて、内容面に関することとしては、(1) 作題のセンスの良し悪し、(2) 使用単語の選定が適切であるかどうか、(3) 選択肢の設定などのさじ加減が適切であるかどうか、(4) 解説の内容が音声学的な知識および理解の裏づけを伴っていてかつ正確であるかどうか、という点であることを学生たちに伝えた。

レポートの分量は、1問につきA4の大きさのレポート用紙に1~2枚を目安に各自全部で3題作成することとし、レポートの提出期限を2月末日として、その取り組みには約1ヶ月の期間を与えた。

3. 分析考察対象の選定

筆者が担当した平成13年度後期の英語音声学講義の履修者は全部で47名であった。その内訳は、1年生19名、2年生0名、3年生19名、4年生7名、5年生以上が1名、そして科目等履修生が1名である(履修上の科目の位置づけとしては1年次対象となつてはいるが平成13年度の実際の履修者は上級生が半数以上を占めていた)。課題のレポートは全員から提出があったが、このうち本論考においては1年生および3年生のレポート内容をその分析対象とすることにした。対象を1年生と3年生にしたのは、履修者数の分布から見て、それぞれある程度まとまった数のデータが得られるということに加えて以下の理由がある。すなわち、1年生を選んだ理由としては、1年生は大学受験を終えてほぼ1年近くが経っているわけであるが、大学に入る前に受験生として試験問題を解いていた頃の勘なりコツが他の学年の人たちよりはまだ残っているのではないかと考えられ、その記憶が今回の模擬問題作成において何らかの形で反映されるのではないかと考えたことにある。また、1年生は1年次の後期の授業で初めて英語音声学に触れたわけであるが、学んだばかりの音声学的知識がレポートの解説部分の中でその言語表現においてどの程度適切に運用されているかということについて関心があったからである。また一方で、3年生をその分析対象とした理由は、3年生はこれまでに別の授業(英語音声学演習)で音声学について一通り学んでいる学生も多く、英語と日本語の音声についてはある一定以上の理解は得ているものと考えられること、そして、教員採用試験を約4ヶ月後に控え、教員志望に向けての意識もいよいよ高まってきていると思われることから、こうした事情が模擬問題作成に

あたって何らかの形であらわれるのではないかと考えたことにある。以上のような点から、1年生と3年生の間で課題レポート内容にどのような違いが見られるのかを考察するのも本論考の目的の一つである。

ところで、このうち実際に提出されたレポートを見ると、教官側の指示した通りの雛型に沿って設問を作らなかった学生が若干名いたので、それは本論考における分析対象から外すことにした。したがって、以下において考察を加えていくのは、1年生が18名、3年生が17名で合計35名分のレポートである。学生一人あたり3題ずつ作成してもらったので、1年生からは合計54題、3年生からは合計51題、全体で105題の設問が今回の分析対象として位置づけられることになった。

4. レポート内容の全般的傾向とその考察

4. 1 設問全体に占める母音と子音の割合について

分析対象とすることになった105題の設問のうち、母音に関する設問は85問(81.0%)、子音に関する設問は20問(19.0%)で、ほぼ4:1の割合で圧倒的に母音に関する設問が多かった。学年別でも同じような傾向を示しており、1年生については全54問のうち母音に関するものは46問(85.2%)、子音に関するものは8問(14.8%)であり、3年生については全51問のうち、母音については39問(76.5%)、子音については12問(23.5%)であった。

設問全体の中で母音が占める割合が圧倒的に多かったということは、見方を変えれば課題に取り組んだ学生たちにとっては、それだけ母音の問題が作りやすいと思われたか、あるいは母音の方に何らかの重要性を見い出したかのいずれかの理由によるものと考えられる。このあたりの事情を日英両言語に見られる音声上の違いという観点から以下において考察したいと思う。

4. 2 母音に関する設問が多かった背景

4. 2. 1 日英両言語における母音の数と種類の違い

日英両言語における母音については、その数と種類において極めて顕著な違いがあるということがあげられる。日本語では母音はアイウエオの5種類であるのに対し、英語では強勢の置かれる位置に現われる強母音だけを例にとってみても、短母音が6種類、長母音が5種類、二重母音が11種類、三重母音が3種類あり、さらに強勢の置かれない位置に現われる弱母音が5種類あることを含めると、母音の数としては全部で29種類もあることになる。初歩の段階にある学習者にとっては、英語の単語を目にし耳にして心の中でその音声をとらえようとした時、その聴覚的な印象から最も近い響きをもつと思われる日本語の音声をあててそれを受けとめるということが予想される。そうすると、複数の英語の母音に対して、同じ一つの日本語の母音をあてて受けとめるということが考えられ、ここに多対一の関係が生ずることになる。たとえば、/æ/と/ɑ/と/ʌ/はその音の響きから、日本語の「ア」に近いものとして受けとめられることになる。したがって、日本語の母音でもってカタカナ読みをあてただけでは、英語の母音間に見られる差異を正しく識別できないということになる。学習内容を正確に理解している人とそうでない人とを明確に区別するという意味での試験問題としての機能をここに盛り込むことができることになり、学生たちの多くはこうした点に着目したために母音に関する設問が多くなったものと思われる。

学生のレポートにおいても母音に関してはこの種の設問が非常に多く、母音に関する設問が全部で85問あった中で、73問(85.9%)であった。その内訳は、1年生が46問中41問(89.1%)、3年生が39問中

32問(82.1%)となっていた。

4. 2. 2 英語における綴り字と発音の対応の複雑さ

母音に関する出題が多かった背景として考えられるもう一つの点は、英語における綴り字と発音の対応の複雑さがあげられる。これは前項で述べた日英両言語間における母音の数と種類の違いにも関連することであるが、一つの綴り字に対して複数の発音が対応するものが英語には多い。例えば“o”の綴り字は、comfortにおける/ʌ/やofferにおける/ɔ/そしてopenにおける/ou/などさまざまな発音が対応し、ここでは一对多の関係が生ずることになり、こうしたところにもまた、知識の有無を問うという意味での試験問題の機能を盛り込む余地を見いだすことができることになる。これは実際の設問においては、見出し語の下線部分と、選択肢の下線部分の綴り字をそろえておいた上でその発音を問うという形式としてあらわれる。

ただ、今回の学生の書いたレポートにおいては、このスタイルの設問が母音全体の設問の中に占める割合は少なく、母音に関する設問が全部で85問あった中で、わずかに12問(14.1%)であった。その内訳は、1年生が46問中5問(10.9%)、3年生が39問中7問(17.9%)となっていて、少ないながらも比率においては学年による違いが見られた。3年生のほうとその比率が高かったということは、3年生のほうで英語音声学に接している期間が1年生に比べて長い分だけ設問形式についての発想に柔軟性が見られるということを表わしているものと考えられる。以下に学生のレポートの中の一例を見出し語、選択肢、発音の順に示しておく。

見出し語	選択肢	発音
most	(a) song (b) above (c) only (d) not	(/ou/:/ɔ/~/ʌ/~/ou/~/ɑ/)
month	(a) wonder (b) not (c) long (d) college	(/ʌ/:/ʌ/~/ɑ/~/ɔ/~/ɑ/)

4. 3 子音に関する設問が少なかった背景

以上、学生のレポートの中で母音に関する出題が多かった理由を、その背後にある日本語と英語に見られる音声上の特徴の違いに求めて考察をしてきたが、子音については先に触れたように、設問全体の中で占める割合が少なかった(全体の19.0%)。これは言葉を換えれば学生たちにとっては子音の問題はそれだけ作りにくく感じたものと思われるが、その背景にある事情について考察してみたい。

選択式の形をとる発音問題においては、受験者は仮にそれぞれの設問における下線部分の音声について、その細かなところまで十分な理解が及んでいなくても、スペリング等の違いから判断して何らかの違いがありそうだとということが推定できれば、とりあえずは正解にたどり着けてしまう場合がある。子音について言えば、例えばsin /sɪn/～sing /sɪŋ/に見られるように、日本人学習者にとっては聴覚上はその区別が大変難しいと思われる音の対立であっても、リスニングとしてではなく筆記試験でしかも選択式の場合には、スペリングを見比べて何らかの違いがあるということを推定できるため、なかなか設問として問いにくいものと考えられる。これをあえて選択式のスタイルで出題しようとする、例えば、singer～fingerに見られるような語中の“ng”を、/ŋ/と読むのか/ŋg/と読むのかというような受験生泣かせの難問が生まれてしまうことになる。下線部分の綴り字をそろえて選択肢間のその発音の違いを問うような設問を考えようとおのずとその種類が限られてくることになり、このような背景があって、学生たちのレポートに占める子音の設問の比率が低かったものと思われる。

5. 設問のテーマ別分析

学生が取り組んだ英語音声に関する模擬問題には、それぞれに作題のテーマが含まれていて音声学的な観点からそれらを分類することができるが、ここでは日英両言語の音声上の差異という点から特に興味深く思われた設問テーマについて取りあげ分析することにした。

分析の手順としては、それぞれのテーマに関して学生のレポートに見られた全般的傾向について考察したあと、学生がそれぞれの設問において選択肢を設定するにあたって考慮したと思われる事柄について、選択肢の配置パターンをその設問内容との関連において考察することにした。

以下の各節で考察することになる選択肢の配置パターンについて、ここでその分析方法の枠を示しておくことにしたい。各設問には見出し語がまず提示され、その見出し語の下線部の発音と同じ音を含むものを選択肢の中から選ばせる形をとるわけであるが、選択肢が4つあってそのうちの1つが正解ということになるので、具体的には残りの3つの選択肢がどのように配置されているのかということがここでの問題となる。論理的な可能性としては、(1) 残り3つの選択肢の下線部がすべて異なる音となる場合、(2) 残り3つの選択肢のうち、2つの選択肢の下線部が同じ音となる場合、(3) 残り3つの選択肢の下線部がすべて同じ音となる場合、のどれかにあてはまるということになる。そこでパターンを明示化するために各設問の下線の音声部分を記号化して種類別にA, B, C, Dなどアルファベットで表わし、見出し語を[A]で表わすことにすると、上記(1)は[A]: A~B~C~D型、(2)は[A]: A~B~B~C型、(3)は[A]: A~B~B~B型、として表わすことができる。

では具体的には、以下において、(1) 日本語の「ア」音に対応する英語母音(/æ/~/ɑ/~/ʌ/)をテーマにした設問、(2) 日本語の「オー」音に対応する英語母音(/ɔ:/~/ou/)をテーマにした設問、(3) 英語の“ng”の発音をテーマにした設問、(4) 英語の“th”の発音をテーマにした設問についてそれぞれ分析をし考察していくことにする。

5. 1 日本語の「ア」音に対応する英語母音(/æ/~/ɑ/~/ʌ/)を含むものをテーマにした設問

5. 1. 1 全般的傾向

日本語式のカタカナ読みをあてはめた時にともに「ア」音で読めてしまうことをテーマにした設問が全部で27問(母音全体の31.8%)あり、母音を扱った設問の中では割合としては最も多かった。学年別の内訳は1年生が14問、3年生が13問であった。日本語式の「ア」音に対応する母音は英語では/æ/と/ɑ/と/ʌ/の3種類がありいずれも短母音である。

このテーマに関する設問で興味深く思われたのは、/æ/と/ɑ/と/ʌ/の3つの音のうち、見出し語として/ʌ/を含む語をあげた学生の割合が高かったということである。その割合は、1年生が14問中8問、3年生が13問中7問でともに半数を越えていた。/ʌ/は綴り字の上では“u”(例: cut) “o”(例: come) “oo”(例: blood) “ou”(例: country)などさまざまな形をとり、これらの綴り字がまたそれぞれさまざまな音形で発音されることから、設問をつくるにあたっては格好の素材であると考えたのではないかと推察できる。

また興味深いと思われたのは、複数の学生がこのテーマの設問の選択肢に同じ単語をその素材として取り入れていたということである。複数の学生が使っていた単語は、/ʌ/についてはblood, won, oven, wonderがそれぞれ4人、cupが3人、/æ/についてはbackが4人、また/ɑ/についてはknowledgeが4人であった。学生のレポートの中に見られたこのタイプの設問は以下の通りである。

knowledge	(a) fr <u>o</u> nt	(b) sn <u>o</u> w	(c) s <u>u</u> btle	(d) w <u>a</u> nt	[1年生]
m <u>o</u> nth	(a) w <u>o</u> nder	(b) n <u>o</u> t	(c) l <u>o</u> ng	(d) c <u>o</u> llege	[1年生]
as <u>pe</u> ct	(a) c <u>o</u> mpany	(b) c <u>o</u> mpile	(c) m <u>u</u> s <u>c</u> le	(d) <u>a</u> lbum	[1年生]
bl <u>oo</u> d	(a) <u>o</u> ven	(b) g <u>a</u> s	(c) <u>A</u> sia	(d) C <u>a</u> nada	[1年生]
bl <u>oo</u> d	(a) b <u>o</u> mb	(b) w <u>o</u> n	(c) t <u>o</u> mb	(d) br <u>o</u> ught	[1年生]
bag	(a) f <u>a</u> ther	(b) en <u>o</u> ugh	(c) bl <u>a</u> nk	(d) c <u>a</u> lm	[1年生]
knowledge	(a) h <u>o</u> me	(b) r <u>o</u> ck	(c) c <u>o</u> me	(d) s <u>o</u> ul	[1年生]
ab <u>o</u> ve	(a) c <u>o</u> mm <u>o</u> n	(b) g <u>o</u>	(c) <u>o</u> ven	(d) gl <u>o</u> rious	[1年生]
w <u>o</u> nder	(a) c <u>a</u> ch	(b) c <u>o</u> ncentrate	(c) b <u>a</u> ck	(d) en <u>o</u> ugh	[1年生]
c <u>u</u> t	(a) p <u>a</u> t	(b) th <u>a</u> nk	(c) g <u>u</u> n	(d) fl <u>a</u> t	[1年生]
w <u>o</u> n	(a) cl <u>o</u> th	(b) s <u>a</u> d	(c) c <u>u</u> t	(d) g <u>e</u> ntleman	[1年生]
understand	(a) y <u>o</u> ung	(b) h <u>e</u> avy	(c) d <u>o</u> ctor	(d) b <u>a</u> ck	[1年生]
w <u>o</u> nder	(a) s <u>a</u> t	(b) c <u>u</u> p	(c) w <u>a</u> nder	(d) <u>o</u> ught	[1年生]
c <u>a</u> p	(a) b <u>a</u> ck	(b) g <u>a</u> te	(c) s <u>u</u> ch	(d) l <u>a</u> rge	[1年生]
w <u>o</u> nder	(a) k <u>no</u> wledge	(b) p <u>a</u> tt <u>e</u> rn	(c) w <u>o</u> n	(d) <u>o</u> perate	[3年生]
c <u>o</u> mfort	(a) <u>o</u> ffer	(b) <u>o</u> pen	(c) <u>o</u> ven	(d) t <u>o</u> gether	[3年生]
bl <u>oo</u> d	(a) n <u>o</u> t	(b) w <u>o</u> n	(c) f <u>o</u> od	(d) w <u>o</u> men	[3年生]
gl <u>o</u> ve	(a) gl <u>o</u> be	(b) n <u>o</u> t	(c) bl <u>oo</u> d	(d) c <u>a</u> ll	[3年生]
apple	(a) c <u>u</u> p	(b) b <u>a</u> d	(c) <u>A</u> sia	(d) <u>u</u> nder	[3年生]
str <u>u</u> ggle	(a) s <u>u</u> bscribe	(b) c <u>o</u> nquer	(c) j <u>u</u> stify	(d) ap <u>o</u> logize	[3年生]
ab <u>s</u> olute	(a) <u>a</u> cept	(b) c <u>o</u> mm <u>e</u> nd	(c) i <u>nt</u> errupt	(d) i <u>mp</u> act	[3年生]
c <u>u</u> t	(a) ab <u>o</u> ve	(b) h <u>o</u> t	(c) b <u>a</u> ck	(d) i <u>ma</u> gine	[3年生]
l <u>a</u> ugh	(a) f <u>a</u> ther	(b) p <u>o</u> nd	(c) c <u>u</u> p	(d) b <u>a</u> nk	[3年生]
knowledge	(a) <u>a</u> nxious	(b) <u>o</u> ut	(c) <u>o</u> ld	(d) w <u>a</u> nder	[3年生]
d <u>a</u> mage	(a) h <u>a</u> ste	(b) <u>a</u> rch	(c) <u>a</u> nchor	(d) <u>a</u> nother	[3年生]
s <u>a</u> nd	(a) j <u>a</u> m	(b) t <u>r</u> ouble	(c) d <u>i</u> fficult	(d) r <u>e</u> sult	[3年生]
c <u>o</u> mfort	(a) <u>o</u> ffer	(b) <u>o</u> pen	(c) <u>o</u> ven	(d) b <u>a</u> ll	[3年生]

5. 1. 2 選択肢のパターン分析

「ア」音に対応する英語母音(/æ/~/ɑ/~/ʌ/)を含むものをテーマにした設問についての選択肢のパターンの分布を表わすとすると以下ようになる。

	1年生	3年生
(1) <u>A</u> : A~B~C~D型	6問 (42.9%)	8問 (61.5%)
(2) <u>A</u> : A~B~B~C型	7問 (50.0%)	5問 (38.5%)
(3) <u>A</u> : A~B~B~B型	1問 (7.1%)	0問 (0.0%)

上記の分布からまずわかることは、(1)および(2)の型がその大半を占めていることである。(1)型は選択肢の下線部に4種類の音声を配置しているものであり、また(2)型は3種類の音声を配置しているものであるが、このパターンが多いのは恐らくテーマそのものの性質と関係があるということが考えられ

る。すなわち、日本語の「ア」音に対応する英語母音には/æ/と/ɑ/と/ʌ/の3種類があるわけなので、学生が作題するにあたってはできるだけさまざまな種類の母音をその選択肢の中に配置したいという意識がそこに表われているものと考えられる。数値を細かく見ると、1年生と3年生でその分布に違いが現れている。1年生は(1)および(2)が多少の違いは見られるもののほぼ同じ割合で分布しているのに対し、3年生は(1)の割合が(2)よりはるかに多かった。これは3年生の方に、内容が豊かな問題を作りたいという意識がより強く働いた結果の表われであると思われる。

5. 2 日本語の「オー」音に対応する英語母音(/ɔ:/~/ou/)をテーマにした設問

5. 2. 1 全般的傾向

日本語式のカタカナ読みをあてはめた時にともに「オー」音で読めてしまうことをテーマにした設問が全部で20問(母音全体の23.5%)あった。学年別の内訳は1年生が11問、3年生が9問であった。日本語式の「オー」音に対応する母音は英語では二重母音の/ou/と長母音の/ɔ:/の2種類があり、この区別は英語学習者にとって紛らわしい音の部類に属するものと思われる。

このテーマの設問についても、複数の学生によって取りあげられた語がいくつかある。複数の学生が使っていたのは、/ou/については、boatが5人、roadが3人、spokeが2人、/ɔ:/については、taughtが4人、abroad および broad がともに3人、bought および caught が2人であった。ここにあげた語が含まれる設問をつぶさに調べてみるとまたいろいろなことが見えてくる。

同じスペリングを含みながらその部分の発音が異なるという観点から、見出し語とともにroad /ou/を配置して、選択肢の一つとしてabroad /ɔ:/を含めた設問(1年生1人)や、broad /ɔ:/を入れた設問(3年生1人)があり、また、見出し語は別の語を置いて選択肢の中にroad /ou/とbroad /ɔ:/を含む設問(1年生1人)を作ったりなど、区別が紛らわしいのをあえて意識して設問の中に取り入れたということを読み取ることができ、着眼点としてはよく考えられたものであると言える。類例としては数こそ少ないものの、law /ɔ:/とlow /ou/の違いを問う設問(3年生1人)もあった。学生のレポートの中に見られたこのタイプの設問は以下の通りである。

<u>grow</u>	(a) <u>caught</u>	(b) <u>fowl</u>	(c) <u>mood</u>	(d) <u>know</u>	[1年生]
<u>alone</u>	(a) <u>abroad</u>	(b) <u>because</u>	(c) <u>note</u>	(d) <u>cow</u>	[1年生]
<u>boat</u>	(a) <u>cause</u>	(b) <u>long</u>	(c) <u>water</u>	(d) <u>post</u>	[1年生]
<u>slow</u>	(a) <u>allow</u>	(b) <u>abroad</u>	(c) <u>warm</u>	(d) <u>coat</u>	[1年生]
<u>raw</u>	(a) <u>option</u>	(b) <u>boat</u>	(c) <u>association</u>	(d) <u>author</u>	[1年生]
<u>road</u>	(a) <u>abroad</u>	(b) <u>count</u>	(c) <u>note</u>	(d) <u>glove</u>	[1年生]
<u>approach</u>	(a) <u>allow</u>	(b) <u>notice</u>	(c) <u>inform</u>	(d) <u>forbid</u>	[1年生]
<u>boat</u>	(a) <u>front</u>	(b) <u>full</u>	(c) <u>October</u>	(d) <u>always</u>	[1年生]
<u>loan</u>	(a) <u>broad</u>	(b) <u>knowledge</u>	(c) <u>only</u>	(d) <u>soft</u>	[1年生]
<u>sought</u>	(a) <u>tone</u>	(b) <u>road</u>	(c) <u>broad</u>	(d) <u>rose</u>	[1年生]
<u>thought</u>	(a) <u>don't</u>	(b) <u>sauce</u>	(c) <u>lose</u>	(d) <u>rose</u>	[1年生]
<u>know</u>	(a) <u>mood</u>	(b) <u>caught</u>	(c) <u>fowl</u>	(d) <u>grow</u>	[3年生]
<u>spoke</u>	(a) <u>taught</u>	(b) <u>boat</u>	(c) <u>bought</u>	(d) <u>daughter</u>	[3年生]
<u>law</u>	(a) <u>low</u>	(b) <u>tall</u>	(c) <u>alone</u>	(d) <u>old</u>	[3年生]
<u>spoke</u>	(a) <u>taught</u>	(b) <u>court</u>	(c) <u>all</u>	(d) <u>boat</u>	[3年生]
<u>most</u>	(a) <u>song</u>	(b) <u>above</u>	(c) <u>only</u>	(d) <u>hot</u>	[3年生]

oppose	(a) <u>tolerance</u>	(b) <u>role</u>	(c) <u>intercourse</u>	(d) <u>surmount</u>	[3年生]
go	(a) <u>all</u>	(b) <u>toast</u>	(c) <u>sport</u>	(d) <u>cause</u>	[3年生]
road	(a) <u>chalk</u>	(b) <u>broad</u>	(c) <u>taught</u>	(d) <u>spoke</u>	[3年生]
host	(a) <u>comb</u>	(b) <u>audience</u>	(c) <u>swallow</u>	(d) <u>ounce</u>	[3年生]

5. 2. 2 選択肢のパターン分析

「オー」音に対応する英語母音(/ɔ:/~/ou/)をテーマにした設問についての選択肢のパターンの分布を表わすとする以下ようになる。

		1年生	3年生
(1)	<u>A</u> : A~B~C~D型	5問(45.5%)	4問(44.4%)
(2)	<u>A</u> : A~B~B~C型	4問(36.4%)	2問(22.2%)
(3)	<u>A</u> : A~B~B~B型	2問(18.2%)	3問(33.3%)

上記の分布からまずわかることは、(1)型が1年生および3年生共に45%前後でそれぞれ半数近くを占め、選択肢の中にさまざまな種類の母音を配置したいという意識が表われている。ところで、前項(5.1)との違いは、選択肢の配置パターンとして(3)型が全体の中ではっきりと位置づけられているということである。これはこの設問のテーマそのものとやはり関係があるものと考えられる。すなわち、英語の/ɔ:/および/ou/を含む単語は、日本語のカタカナ読みをあてるだけではその区別がつきにくいものが多い(例えば、英語では“road”は/roud/、“broad”は/brɔ:d/というように下線部は別々の音であるが、カタカナ読みをすればそれぞれ「ロード」「ブロード」となって英語の下線部の違いは反映されない)、あえてこの部分に設問のテーマを特化して/ɔ:/か/ou/かのどちらであるかを問う設問として作題しようとした心の表われであると考えられる。この(3)型は1年生(18.2%)よりも3年生(33.3%)の方に多く見られたのは、それだけ深い洞察のあらわれであると考えられる。

5. 3 英語の“ng”の発音をテーマにした設問

5. 3. 1 全般的傾向

本項では子音に関する設問のうち、英語の“ng”の発音をテーマにしたものに触れておくことにする。英語の“ng”の発音をテーマにしたものは、子音の設問全体(20問)のうち6問であって30%を占め割合としては非常に高いものであると言える。その内訳は、1年生が2問、3年生が4問であった。

このテーマに関して際立った特徴としては、選択肢の中にあらわれる単語の種類が極めて限られ同じ語が複数の学生によって取りあげられているということである。例えばsingerは6問中6問(100.0%)、つまり“ng”の発音をテーマにした学生すべてがこれを選択肢の中に取り入れている。以下、fingerが5問(83.3%)、angerおよびlongerが4問(66.7%)、hangerが3問(50.0%)といった具合である。学生のレポートの中に見られたこのタイプの設問は以下の通りである。

long	(a) <u>finger</u>	(b) <u>longer</u>	(c) <u>singer</u>	(d) <u>youngest</u>	[1年生]
hang	(a) <u>finger</u>	(b) <u>anger</u>	(c) <u>singer</u>	(d) <u>longer</u>	[1年生]
singer	(a) <u>finger</u>	(b) <u>anger</u>	(c) <u>hanger</u>	(d) <u>longer</u>	[3年生]
finger	(a) <u>ringer</u>	(b) <u>singer</u>	(c) <u>hanger</u>	(d) <u>hunger</u>	[3年生]
hanger	(a) <u>finger</u>	(b) <u>singer</u>	(c) <u>longer</u>	(d) <u>anger</u>	[3年生]
sink:	(a) <u>Sim</u>	(b) <u>sin</u>	(c) <u>singer</u>	(d) <u>anger</u>	[3年生]

5. 3. 2 選択肢のパターン分析

英語の“ng”の発音をテーマにした設問についての選択肢のパターンの分布を表わすとすると以下のようになる。

	1 年生	3 年生
(1) <u>A</u> : A ~ B ~ C ~ D 型	0 問 (00.0%)	1 問 (25.0%)
(2) <u>A</u> : A ~ B ~ B ~ C 型	0 問 (00.0%)	0 問 (00.0%)
(3) <u>A</u> : A ~ B ~ B ~ B 型	2 問 (100.0%)	3 問 (75.0%)

選択肢の配置パターンも極めて特徴的で、(3)型が(ほとんど)すべてを占めていた。これは“ng”の発音を問う場合には/g/と/gg/のどちらで読まれるのかという問題に特化せざるを得ないというスペリング上の制約があるためと考えられる。

5. 4 英語の“th”の発音をテーマにした設問

英語の“th”の発音をテーマにしたものは、子音の設問全体(20問)のうち7問であって35%を占め割合としてはこれも高いものであると言える。その内訳は、1年生が4問、3年生が3問であった。このテーマに関する設問には2つのタイプが見られた。

一つは、見出し語と選択肢すべてに“th”の綴り字を含む語を配置して、その部分が/θ/と/ð/のいずれで発音されるかを問う設問であり(20問中3問：1年生1問、3年生2問)、それらは以下の通りである。

southern	(a) breath	(b) cloth	(c) wreath	(d) smooth	[1 年生]
bathe	(a) thoroughly	(b) worth	(c) method	(d) smooth	[3 年生]
theme	(a) thought	(b) though	(c) there	(d) Thai	[3 年生]

もう一つのタイプは、日本語読みをした時に「ス」音に相当するものとして“th”と“s”その他を含む語を設問の中に配置したケースである(20問中4問：1年生3問、3年生1問)。このタイプの設問は、スペリングの違いから判断して発音に関して何らかの違いがありそうだがということが容易に推定されてしまうものであり、消去法によって選択の幅が狭まり正解にたどり着きやすくなるタイプの設問である。これは発想としては面白いのであるが、選択肢の選定という点において検討の余地がある。1年生の方が3年生よりもその割合が多かったのは、音声学に接してからの期間が比較的小さいということが関係しているのではないかと考えられる。学生のレポートの中に見られたこのタイプの設問は以下の通りである。

they	(a) easy	(b) nose	(c) cloth	(d) smooth	[1 年生]
three	(a) scene	(b) breathe	(c) theme	(d) machine	[1 年生]
month	(a) dress	(b) breathe	(c) short	(d) theme	[1 年生]
loose	(a) disease	(b) increase	(c) though	(d) worth	[3 年生]

6. おわりに

以上本稿では、平成13年度に筆者が担当した「英語音声学講義」において学生たちに課した英語発音問題の模範的作成に関する課題レポートの内容について、主に数値の点から読み取ることのできるその特徴について分析し考察してきたのであるが、全体として気づいたことを最後にまとめておきたい。

まず、レポート内容に関して1年生も3年生もテーマの設定や設問の中で使用する単語そのものについてはそれほど大きな違いは見られなかった。これは学生たちが参照した資料(英語音声学関係の文献、英和辞典、受験参考書や問題集など)に大きな差がないことに起因するものと考えられる。また、それぞれの設問に対する選択肢の配置パターンも日英両言語の音声上の特徴を背景にして作題しようという意識がそれぞれに反映されており、全体としてはほぼ同様な傾向を示していた。ただ、細かな点においては第5章で設問のテーマごとに分析をした際に明らかになったように、学年による違いが見られたものもあり、3年生のレポートには、より内容の豊かな設問を作ろうという意識や深い洞察力があらわれていると思われるものがあり、思考のきめ細かさが感じられたものが多かった。

その他、学生のレポートを読んでいて全体として感じたことは、学生たちにとっては今回のように英語の発音問題を自分で実際に作ってみるという課題は初めてのことであったようで、いろいろと苦心しつつも楽しみながら取り組んでいるらしいということがレポートの文面からさまざまに伝わってきたということである。今後もさまざまな着想のもとで、学生たちに将来の英語教師に向けての意識を高めてもらうような試みを授業活動の中に取り入れていきたいと考えている。

参考文献

- 神山孝夫 (1995)『日欧比較音声学入門』, 鳳書房, 東京.
亀井孝他 (1996)『言語学大辞典第6巻術語編』, 三省堂, 東京.
シュービゲル, M (1973)『音声学入門』, 大修館書店, 東京.
城生佰太郎 (1988)『音声学』, アポロン, 東京.
竹林滋 (1996)『英語音声学』, 研究社, 東京.
安井泉 (1992)『音声学』, 開拓社, 東京.
Crystal, David (1997) *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*, Blackwell, Oxford.
Trask, R.L. (1996) *A Dictionary of Phonetics and Phonology*, Routledge, London.